２０２０年度事業報告（案）

（2020 年 1 月 1 日～12 月 31 日）
法人名称　NPO 法人　教育支援グループ　Ed.ベンチャー

1. 事業成果

「世界の視点を持って私たち自身の足元を見つめ、世界の動向を視野に入れつつ、足元の活動に取り組む」ことを目標に掲げた 2020 年度であるが、「コロナ禍」によって、その目標を掲げずとも、世界的視点や動向を視野に入れなければならなかった 1 年であった。世界での新型コロナウイルスの感染の広がり、日本での広がり、そして、それに伴う各国政府の対応、それと比較しつつ理解に苦しむ日本政府の対応。何が必要で何が不必要なのか。問われる経済活動や社会活動。そこに浮かび上がる「エッセンシャルワーク」。それらを通して、私たちがいかに虚構の中を生かされてきたことも感じる。私たちは、「世界と足元を結ぶ意思」のもとで、足元から世界を見つめるという視点の転換を余儀なくされた 1 年でもあった。

こうした中で、私たちが目指したのは「学びを止めない」ということである。2 月末に突然始まった学校の一斉休校により、学校も教師も戸惑い・混乱していた。不要不急の外出自粛をめぐり Ed.ベンチャーの活動も当初中止の方向も検討された。しかしながら、選択されたのは、活動を止めないことだった。今必要なことは何かを考え、決して得意とはいえない ICT 技術を学び、足元からできることを積み上げてきた 1 年でもあった。そうした結果もあって、2020 年度の事業の総括においても、コロナ禍での大きな事業の後退をあげる必要はなかった。それだけでなく、学習教室の家庭訪問や「三密」を避けた学習教室の開催、コロナ禍で多角的に教育を考える必要から生まれた連続教育講演会など、新しい活動のあり方を模索し発展した事業もある。

不測の事態の中でも、「成熟社会を目指し、競争的でない、多様性を認め、持続可能な社会を構築する」という目的に「学びを止めない」で活動を継続できたことを、今年度の総括としたい。

2. 事業内容

学校支援事業　①理論学習会

【2020年事業目標】
教育現場の課題を捉え、教員として、いろいろな背景を持つ子どもや弱い立場に置かれる子どもが「つながり」を持てることを目的とした学習会を行う

【事業総括】

今年度は、コロナの影響で学校がこれまで抱えていた課題がより目に見える形となった。現場で教員が目の前に突き付けられた課題を整理したり、多角的な視点で学校や子どもの育ちを考えたりする機会として本学習会が機能した一年であった。

緊急事態宣言下では、開催をオンラインに切り替えた。その後、より多様な参加の仕方を模索し、会場を借りてスクリーンを設置し、ライブ中継をして開催した。直接会場に来たい人も、子どもがいたり体調に不安があったりして自宅から参加したい人、他地域の人も含みこんで一つの空間で議論ができた。参加者の層が広がったので、この同時開催の有効性を感じた。機材の設置など大変に思えたが、実際やってみることでハードルが下がり、運営側としては出来ることが増えてよかった。また、コロナでそれぞれの参加者がもつ危機感が可視化され、話したいという思いをもって参加される方が多く、学校の現状について情報交換したり、悩みを話したりする場にもなっていた。多忙な中だからこそ、改めて時間をとって現状を確認し合う場の必要性を感じた。

事業目標に加えて、実践につながることを意識した全４回の学習会では、教員からの実践報告と事例報告、さらに教育学と社会福祉の専門の先生の講演を組み込んだ。理論的な話から現場の具体に落として考えたり、事例に対して専門的な知識を得てアプローチを考えたりすることができた。

参加者との議論の中で、競争的なシステムの中で過ごすことを強いられている子どもたちにとって、不利な立場にある子どもはさらに不利な立場に追いやられていく現状が見えてきた。そのことに気づいたとき、現場で教員は誰に寄り添い何をどう導くのか、どこに向かって何を発信することができるのか、という課題が立った。担任として教室を包括的にとらえる視点、子ども個人の背景を分析する視点、現在の社会構造と関連させる視点、授業の中に仕組みをつくる視点、縦割りではなく他機関とつながる視点、はざまにあるものに目を向ける視点などなど、様々な意見が出てきた。色々な立場の人と意見を交えることで、学校の特殊性が明らかになった部分もあるだろう。本学習会のベースにある「教育と貧困」の問題は、格差が広がる社会の中で容認されつつある空気すら感じる。だからこそ、これをテーマに声を上げていく必要があると考えている。学んだことを他の場面で使うことができれば、教育現場においても、これまでとは異なる展開の可能性もあるはずであり、本年度は実践につながる現実的な取り組みにつなげられる機会となった。

コロナの影響で保護司の方にお話を頂くことが叶わなかったので、今後の学習会にて開催出来たらと考えている。

担当者	●活動代表（理事）　清水美希　馬場有希 ○スタッフ　根岸知世
内容・日時・場所・参加者数	原則第一水曜日 19 時～21 時　全4回 ① 5月 13 日（水）19 時～21 時 学級づくり～子どもが育つ集団をつくる～ 講師：清水睦美氏（日本女子大学教授） 場所：オンライン(Zoom)　参加人数：16 名 ② 6月 6 日（土）13 時～15 時 支援が必要な子、弱い立場の子を周りの子との関わりの中で育む 報告：岡部千春氏（大和市立上和田小学校教授） 場所：オンライン(Zoom)　参加人数：17 名 ③ 10 月 7 日（水）19 時～21 時 報告・座談会「『今』の学校、どうなっているの？」 報告：大和市内小・中学校教員 場所：大和市シリウス 610＆オンライン(Zoom) 参加者：10 名 ④ 11 月 4 日（水）19 時～21 時 事例検討会「人と制度、機関をつなげる実践」 報告：大和市内中学校教員 講師：今井伸氏（十文字学園女子大学教授） 場所：大和市文化創造拠点シリウス 610＆オンライン(Zoom) 参加者：15 名（会場 11 名、オンライン 4 名） （のべ参加者数 58 名）
収入金額	3,500 円（参加費）
支出金額	25,974 円（賃借料 3,700 円、諸謝金 22,274 円）

②授業研究会

【2020 年事業目標】 ひとりひとりが位置づく学習空間と時間の創出をめざす
【事業総括】 今年度は、「ひとりひとりが位置づく学習空間と時間の創出をめざす」という目標を掲げ取り組んできた。当初５回計画していたが、コロナで３回しかできなかった。 しかし、①教師自身が自分中心の授業ではなく、児童との対話や児童同士の交流が生み出されるような授業づくりが必要だということ。②同一教材でも児童の学習到達度や興味関心を勘案して教材を用意することが大切だということを共通理解できたと思う。 第１回は、「教師は伝達者ではなくいかにして媒介者たりうるか」というテーマで行った。長い自粛期間、学校は休校措置になった。勉強が遅れるのではないかというあせりから、学校現場では、今まで以上に教師が一方的に進める授業になりかねない恐れがあっ

た。だが、学校生活が突然になくなった、しかも長い間。だからこそ「子どもたちは、自分にとって学校って何だろうか。」という問いが自覚するしないにかかわらず生起したのではないか。そのことを教師たちは、自分たちの問いにできたのか。 そこで、「久しぶりに学校で会った子どもたちから何を受け止め、何を語りあったのか。」をメインに意見交換した。子どもたちは一様に「友だちに会いたかった。」と語ったという。また、不登校気味だった児童が学校に来たという。分散登校という期間だったことから 40 人近い数の学級集団がいかに彼にとって息苦しいものだったのかが想像できた。すなわち、子どもたちにとって学校は「学習の場」より「友だちと一緒に過ごす場」としてかけがえのない場所であると意識されたことが分かった。教室の中に掲示板を設置してその日会えない友達に思い思いにメッセージを綴ることで全員登校日を不安なく迎えるようにしたというアイデアも紹介され、「生活の場」としての意味の大切さを再認識する話し合いになった。だが、自粛期間中にでた膨大なプリントに圧迫された子、家や塾でリモート学習に取り組んだ子など学力格差がついたことも明らかになった。だからこそ、教師は、「学校」が、「友だちの存在を意識できるような学習の場」になるように取り組むべきだということが改めて確認された。 第２回は、「同一空間の中で発達に応じた課題と自発的な学習の組織化は、可能か」というテーマで行った。これは、とりもなおさず、教室の中で、一人ひとりがきちんと位置付けられるために教師が工夫しなければならない課題であると思ったからである。 具体的には、大村はま先生の説明文の読みとりの実践と提案者の算数の時間の実践を紹介して話し合われた。黒板の前で教科書を見ながら１問１答をくりかえす平板な授業が多い。これでは、「学習に食らいつきにくい子」は救われないし、すでに塾などで教科書の内容を分かっている子にとっても魅力あるものではない。もっと、自分の目の前にいる児童の声を聴きとり、想像して「学びのおもしろさ」「知的探求の面白さ」を創出していかなければいけないということが自覚化される話し合いになった。 第３回は、「子どもたちは、発見すること、考えることが大好き！」を掘り起こす教材の工夫　～教科書を生かしつつ教科書を乗り越えて～というテーマで行った。 かねてから、「教科書を教える教師の急増」に危惧してきた。教科書は今目の前にいる児童のために作られてはいない一般的な教材。目の前の児童を想定し、目の前の児童と対話しながら、補足したり、作り変えたり、組み替えたりしながら教材化しないかぎり子どもたちにとっては、無味乾燥な教材でしかないのではないか。教師たちの多くの授業に「子どもたちが存在していない。」そこで、子どもたちは「発見が好き、考えることがきらいではない」ということが垣間見える実践を紹介しながら議論した。 だが、話し合いの中で中心を絞り切れず深めきれなかったのも事実である。 来年度は、１時間の授業づくりに的をしぼり、より具体的な研究会にしたい。	
担当者	●活動代表（理事）内藤順子
内容・日時・場所・参加者数	①　6 月 18 日（木） 「教師は伝達者ではなくいかにして媒介者たりうるか」 オンライン(Zoom)　参加者７人 ②　8 月 20 日（木）

	「同一空間の中で、発達に応じた課題と自発的な学習の組織化は可能か」　オンライン(Zoom)　参加者５人 ③　12月17日（木） 「子どもたちは、発見すること、考えることが大好き！」を掘り起こす教材の工夫 ～教科書を生かしつつ教科書を乗り越えて～ オンライン(Zoom)　　参加者３人
収入金額	０円
支出金額	０円

学校支援事業　③スタディツアー

【2020年事業目標】 今日的な教育課題や社会状況の現場を実際に訪れることで、日常の課題を広い視野から考えることができるようにする。	
【事業総括】 児童養護施設「唐池学園」への訪問を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大のため、中止となった。事前学習会として予定されていた、スクールソーシャルワーカー（SSW）上原樹氏を講師に迎えての講演会は、オンラインで開催した。 社会的養護について、およびその支援体制、児童養護施設をはじめとする関連機関について、丁寧に説明していただいた。また、後半では関係機関との連携に関する事例を紹介いただいた。家庭、学校、関連機関それぞれからSSWによる丁寧な聞き取りから、課題整理をして、子ども・家庭が持っていた「潜在的な課題（ニーズ）」の解決へと至った事例であり、支援の流れを確認することができた。毎日子どもたちと生活する中で、子どもや家庭が持つニーズを拾い上げて、関連機関や制度に関する情報・知識を持つ SSW へとつなげることが、学校現場の役割であると実感した。また、虐待が疑われるケースでは、まずは子どもを守ることを第一に考え、躊躇なく通告ができることが求められる。そのためにも、多くの事例を知る必要性があると感じた。	
担当者	●活動代表（理事）　池田喬
内容・日時・場所・参加者数	事前学習会：10月31日（土） 講師：上原樹氏（大和市青少年相談室ｽｸｰﾙｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰ） オンライン(Zoom)　　参加人数11名
収入金額	０円
支出金額	０円

学校支援事業　④産休・育休・働くママ・パパのための学習会

＊ 担当者の出産のため、１年間活動を休止しました。

学校支援事業　⑤外国人の子ども理解のための学習会

【2020 年事業目標】
外国人の子どもの現状や課題を理解する場、外国人の子どもに関する専門的な知識を学ぶ場を企画運営する。

【事業総括】
〈学習会〉
予定していた学習会を再編し、オンラインに変更して 3 回に分けて行った。
1 回目は、「国際教室って何をするところ？」をテーマに、学習会スタッフが話題提供をした。国際教室担当の経験を持つスタッフからは国際教室の枠組みや役割、担任としてどんな支援ができるかを扱った。当事者として、中学校教員として外国にルーツを持つ子どもたちと関わっているスタッフからは、学校にはどんな外国にルーツを持つ子どもたちがいて、そのルーツ、アイデンティティとの葛藤などに向き合うことについて扱った。
2 回目は、「ビザ・在留資格を知る」をテーマに、外国人の子どもたちや親の在留資格を知ることによって何がわかるのか。そもそも在留カードを見せてもらってもよいのか。日本が「移民の受け入れをしていない」と言いつつも今まで日本はどのような政策をとっているのか。これらの疑問やカラクリについて理解を深めるような内容となった。
3 回目は、「ルーツ別の来日経緯を知る」をテーマに、外国にルーツを持つ子どもたちがなぜ日本にいるのか、母国から日本へきた経緯をルーツ別に社会背景や歴史的背景を含めて紐解き、子どもたちが抱えるであろう課題や言語獲得の困難さについて扱った。
3 回を通して、国際教室担当者だけでなく、担任という当事者として、外国にルーツを持つ子どもたちに向き合って居場所を作ることが大切だと言う声がたくさん挙がった。一方、オンラインで講義中心だったため、参加者の反応を読み取りづらかったので、今後はオンラインでも参加者同士の考えや体験談なども交えた学習会にしていきたい。
〈事例研究会〉
事例研究会は、外国にルーツを持つ子どもたちの具体的な事例を通して、彼らの背景にある事情や問題を読み解く力をつけていこうという狙いで 8 回開催した。学校で外国にルーツを持つ子どもたちを担当している先生方から事例を提供してもらい、その事例をもとに協議を行った。協議の中では、様々な見方や実践を出し合うことができ、研究会のアドバイザーの大学教授からは、外国にルーツを持つ子どもたちの研究をもとにした外国人理解に関する知識を学ぶことができた。小中学校教員、大学生、大学院生、地域ボランティア、日本語指導者等様々な立場の方の参加があり、参加者の幅の広がりが見られた。一方で参加人数が多いとは言えず、特に教員の参加者が減ってきているので、小中学校の先生への研究会への参加を促す手立てを検討する必要がある。

担当者	●活動代表（理事）西岡歩 ○スタッフ　篠原弘美　神戸芳子
内容・日時・場所・参加者数	〈学習会〉 ① 4 月 22 日（水）19:00～21:00 国際教室って何をするところ？

	講師：篠原弘美氏（事業担当者）・西岡歩氏（事業担当者） オンライン(Zoom)　参加人数30名 ② 6月23日（火）19:00～21:00 ビザ・在留資格を知る 講師：清水睦美氏（日本女子大学教授） オンライン(Zoom)　参加人数15名 ③ 8月4日（火）19:00～21:00 ルーツ別の来日経緯を知る―子どもたちの抱える課題の違い 講師：清水睦美氏（日本女子大学教授） オンライン(Zoom)　参加人数16名 〈事例研究会〉 水曜開催 19：00～21：00　1/22 5/20 7/22 10/28 場所：ベテルギウス会議室２　オンライン(Zoom) 土曜開催 13：30～15：30　2/29 6/13 9/11 11/21 場所：大和市ポラリス607　オンライン(Zoom) （のべ参加者数　学習会61名　事例研究会117名）
収入金額	8,600円（参加費）
支出金額	30,038円（賃借料1,400円、諸謝金22,274円、印刷製本費3,400円、通信運搬費2,100円、消耗品費864円）

学校支援事業　⑥インクルーシブな社会を目指す学習会

【2020年事業目標】
①インクルーシブ社会を目指す教育のあり方への理解を深める。
②学校現場でのインクルーシブな教育の実現の可能性を探る。

【事業総括】

今年度は、「特別支援教育」を考える学習会から、より広い文脈で「障がいのある／ない」を考えようという方向性のもとで、事業名を「インクルーシブな社会を目指す学習会」に変更して事業を行った。

事業目標①については、“インクルーシブ”という言葉とともに様々な場面で登場する“特別支援”の指し示す内容に注視しながら、世界のインクルーシブ教育の現状を知るための学習会を企画した。以下では、その具体的な内容を示していく。

5月、脳性マヒの当事者団体である「青い芝の会」の活動についての学習会を開催した。「我々を不幸だと勝手に決めつけるな」という当事者の力強いメッセージと共に、「障がい者への配慮」が時として排除につながり、ありのままを受け入れて分断を作らず共に生きようとする“インクルーシブ”とは逆行する可能性があると感じる学習会となった。

9月の学習会は、昨年度、講演をお願いした二羽泰子氏に企画をお願いして各国のインクルーシブ教育の現状や位置づけ、政策の違いについて学ぶ企画となった。「インクルーシブ」の方法は国によって違いがあり、文化や歴史の違いから来るインクルーシブ教育の

現状は、まさしく「インクルーシブ」を考えるきっかけとなった。 10月の学習会では、講師の日本女子大学教授清水氏による、「個人の心理への理解が多様な社会現象の理解につながり、対人関係・社会を『よい』方向へと導く」という考えのもと発展してきた“心理主義”について学ぶことができた。心理主義の浸透により引き起こされる様々な“生きづらさ”について考えるとともに、無意識のうちに「様々な問題の原因を個人に求めている」のではないかと考えさせられる学習会となった。 事業目標②については、学校現場でインクルーシブな教育を実現するためにできることを考えることを目指した。 6月の学習会では、9月同様、二羽泰子氏の企画で“共生”をキーワードに、多様な子ども達の学級づくりを考えることができた。目の前の課題を個人ではなく集団の問題と捉えることが、集団の分断を回避するために必要だと学ぶことができた。“共生”は子ども達だけでなく、教員集団・学校全体の課題として取り組む必要性を改めて感じた。 12月には、「インクルーシブなクラスづくり」をテーマに、中学生の実感としてインクルーシブを考える学習会を行った。インクルーシブなクラスだという実感を読み取るために、「居場所があるか」「集団の一員としての実感」等の項目でアンケートを実施した。参加者からは、「『集団』という表現を使うことは、『その集団以外』を生み出してしまう。そこに排除が生まれてしまう。」という指摘があり、インクルーシブな視点を持つことの難しさと、今後も学習を重ねていくことの大切さを感じた。教室にいる子ども一人ひとりの課題や家庭環境、子ども同士の関係性を見取ること。教室の中の多様性を認める環境をどの様に創っていくのか。“子ども同士が排除しない”インクルーシブなクラスづくりのために、教師の押しつけにならないことを、これまで以上に意識する必要性を感じた。 本年度の事業では、計5回の学習会に続けて参加いただける方もあり、つながりを持った学習会を展開することで、それぞれのテーマへの学習を深めることができた。また、共に学びあうことでより広い視野や、多くの視点を持つことができた。参加者からの「こんなことを学びたい」といった意見やそれぞれの課題を持ちよることで、より開かれた事業の展開が期待できると考えている。 来年度も、事業の企画が担当者の学びの場であるとともに、ともに学びあえる集団を創ることのできるものにしていきたい。	
担当者	●活動代表（理事）森尾宙 ○スタッフ　清水睦美　　（のべ従事者数　2名）
内容・日時・場所・参加者数	① 5月27日(水)　19:00～21:00　オンライン(Zoom) 内容：「障がいを取り巻く社会の歴史を知る ～「青い芝」の運動に学ぶ～」 参考文献： 横田 弘 著『障害者殺しの思想(増補新装版)』現代書館 横塚晃一 著『母よ！殺すな』生活書院 立岩真也 著『青い芝　横塚晃一　横田弘：1970年へ／から』Kyoto Books ② 6月24日(水)　19：00～21：00　オンライン(Zoom)

	内容：合理的配慮と多様な子どもたちの学級づくり ～ジレンマを乗り越えるために～ 講師：二羽 泰子氏（東京大学大学院教育学研究科付属 バリアフリー教育開発研究センター） ③ 9月2日（水） 19：00～21：00 オンライン（Zoom） 内容：世界のインクルーシブ教育～欧米からアフリカまで～ 講師：二羽泰子氏（東京大学大学院教育学研究科付属 バリアフリー教育開発研究センター） ④ 10月14日（水） 19：00～21：00 オンライン（Zoom） 内容：進む“心理主義化” ～特別支援教育とインクルーシブ教育の違い～ 講師：清水睦美氏（日本女子大学教授） ⑤ 12月9日（水） 19：00～21：00 オンライン（Zoom） 内容：インクルーシブなクラスづくり ～生徒の実感としてのインクルーシブ～ 発表：森尾宙（綾瀬市立城山中学校教諭） （のべ参加者数46名）
収入金額	0円
支出金額	22,274円（諸謝金22,274円）

外国人支援事業

⑦子どもの居場所・学習支援教室（エステレージャ☆ハッピー教室）

【2020年事業目標】

外国にルーツのある子ども同士のつながりを深めることを意識して、学習支援を行う。また学習だけではなく、家庭や学校の話を丁寧に聞きながら、子ども同士がお互いの考えを交換できる時間を作りながら支援をする。

〈小学生教室〉

教科学習支援として、宿題の他、国語・算数を中心に学年ごとの習得すべき内容の教材を用意して学習の支援を行う。学習内容の理解を深めていけるよう、丁寧な説明を加えながら学習を進めていく。漢字を楽しみながら学習したり、工作など体験的な学習をしたりしながら集団の中で学ぶ時間を定期的に設ける。

〈中学生〉中学生に対しても、丁寧な説明を加えながら学習を進め、学習内容の理解を深めていく。普段の学習支援の他、定期テストや高校受験支援も行う。定期テスト前にはテスト対策の学習会を、中3生には受験対策学習会を準備する。また、中2生には進路学習会を実施し、先輩の経験から学ぶ機会を持ち、早くから将来についての計画を持てるような時間を作る。

〈母語教室〉

子どもたちの母語の維持、獲得のために、母語話者スタッフによる母語教室を定期的に開催する。学習計画は、母語話者スタッフとともに関係スタッフが一緒に考えていく。

【事業総括】

登録制を継続して、小中学生への学習支援を行った。

コロナ禍で市内の学習センターが休館となり、場所の確保ができなかったため、3月～6月は教室が開催できなかった。そのため、定期的に電話連絡をしたり家庭訪問をしたりして、子どもたちの様子や家庭の状況を把握するように努めた。7月には学習センターが開館されたが、使用人数に制限があったため、大和市内外の 2 グループに分けて分散通室という形で 8 月までは教室を開催した。分散開催中は、参加する子どもの人数も少なかったが、9 月からは通常通りの開催となり、参加する子どもの人数は以前に戻ってきた。

教室の休みや分散開催などにより、保護者会の開催が2学期はできなかった。

〈小学生教室〉

宿題の支援が主であったが、宿題の他に、子どもに応じた国語・算数の教材を用意して学習支援を行った。学習支援の中で、子どもたちの話を丁寧に聞くようにした。子どもたちが持参する宿題は、算数と漢字のドリルが多いが、漢字練習はしているがその意味や使い方が分かっていない場合が多く、漢字を苦手とする子どもが多いため、漢字を楽しみながら学習できるような体験的な集団授業を企画した。

〈中学生教室〉

学校や家庭生活、進路などの話を丁寧に聞きながら学習支援を行った。持参した課題に真面目に取り組んではいても、教科学習に使われる日本語が十分に理解できていないために思うように学習が進んでいかない様子が見られるので、丁寧に説明を加えながら支援するようにした。小学生教室の集団授業に参加する機会があったが、小学校の学習内容を学び直すことができた。中 3 生は、高校生スタッフに希望する高校の話を聞いて意欲を高めたり、自分自身の進路について考えたりする姿が見られた。11 月には、エステレージャ出身の高校生から受験体験や高校生活の説明を聞く授業を企画した。冬休みには中 3 生対象に受験対策の学習会を開催し、中学校の先生の協力を得て、受験勉強や面接練習に取り組んだ。これらを通して中3生は受験に向かう姿勢を作ることができた。

〈母語教室〉

子どもたちの母語の維持のために、母語話者のスタッフによる母語教室を開催したが、コロナ禍で教室が休みだったり分散開催だったりしたため、定期的に開催することは難しかった。内容は絵本の読み聞かせや文字学習などを行った。学習の進め方や時間配分など、関係スタッフによる丁寧なアドバイスや授業への協力などが必要であった。

〈その他〉

・小学生対象に体験的集団授業を行う計画だったが、漢字、コロナ関連、理科関連の内容であり、中学生も参加した。漢字学習と理科関連の学習では、小中学生が協力をして楽しみながら学習する様子が見られた。また、コロナ関連の学習では、小学生が理解できない言葉を中学生が優しい言葉に置き換えて解説をしながら学習を進めることができた。今後も、小中学生が一緒に学べるテーマを考えて、学習できる機会を作っていきたい。

・保護者と子ども対応に関して、学校とつながる機会があった。入学時の説明会にスタッフが付き添うことで学校とつながりを持つことができ、学校と保護者の対応の手助けをしたり、心配な家庭の状況を学校に連絡して子どもへの支援をお願いしたりすることがあり、保護者や子どもを学校へつなぐ役割を果たすことができた。 ・今後新型コロナの感染が再拡大し会場が利用できない場合の対応を検討する意味もかねて、7月以降の教室ではZoomを利用したスタッフの参加が試行された。会場によってはWi-Fiが利用できないことが明らかになった。今後もZoomでの学習支援の可能性を検討していく。	
担当者	●活動代表（理事）篠原弘美　馬場貴司　福島聖子 ○スタッフ 角替弘規 保坂克洋 高島奈美恵 清島光 根岸佐織 井上哲夫 横矢玄 中川恵理 相模女子大学ボランティアサークル「ミント」　（のべ従事者数196名）
内容・日時・場所・参加者数	毎週土曜日　10：30～12：30 1/11 18 25, 2/1 8 15 22 29, 7/11 18 25, 8/1 8 22 29, 9/5 12 19 26 10/3 10 17 24 31 ,11/7 14 21 28, 12/5 12 19 26 中3受験対策学習会　12/25 26 場所：大和市立林間小学校 多目的室 図工室 大和市ベテルギウス 会議室1, 2 大和市シリウス 606 607 609 大和市ポラリス 会議室3 （のべ参加者数　小学生122名　中学生70名　合計192名）
収入金額	200,000円（県中央労福協共催金）
支出金額	207,615円（給与手当 68,602円、保険料 9,193円、賃借料 64,150円、諸謝金 11,135円、旅費交通費 5,560円、印刷製本費 845円、通信運搬費 21,639円、消耗品費 26,491円、雑費円）

子ども支援事業　⑧愛川学習支援　Friends☆Star教室

【2020年事業目標】 ボランティアコーディネーターを育成する。 定期開催に向けてスタッフを確保する。	
【事業総括】 新型コロナの感染拡大前の1・2月が予定通り開催できたが、3月以降、使用施設の休館に引き続き、コーディネーターが介護施設職員ということもあり、実施することができなかった。先の見通しがなかなか立てられず、つながりきれないところがあった。	
担当者	●活動代表（理事）清水睦美 ○スタッフ　角替弘規　清島光　武内敏子
内容・日時・場所・参加者数	1月 8日（水）18:00-19:30　スタッフ含む参加者3名 1月22日（水）18:00-19:30　同　3名

	2月 5日（水）18:00-19:30　同　4名 2月19日（水）18:00-19:30　同　3名　　（のべ参加者数13名）
収入金額	0円
支出金額	19,249円（賃借料2,400円、諸謝金13,364円、旅費交通費2,880円、印刷製本費605円）

学校・外国人・子ども支援に関する普及啓発事業

⑨教育相談

【2020年事業目標】 相談事業を通して、ニーズの把握と必要な事業の展開の仕方を検討する。	
【事業総括】 コロナ禍における活動の自粛要請により、相談事業の規模は減ることになった。この数の減少は、一方で、当事者の活動範囲が狭まり、足元でできる活動に範囲が狭まったこと、他方で、ニーズが見えにくくなったことの両方が考えられる。この二極化の状態を基本的な理解としつつ、2021年度の事業設計を検討する必要がある。具体的な内容に関しては以下の通り。	
担当者	●活動代表（理事）松永雅文 ○スタッフ　神戸芳子　篠原弘美　清水睦美　林幹也
内容・日時・場所・参加者数	①　（2016年より継続）エステレージャ・ハッピー教室の運営相談：未開催（担当者間の調整で新しい形の教室運営へと進むことができ、相談の必要がなくなった。）終了予定。計0回 ②　（2019年より継続）「すたんどばいみー基金」から移管された当事者相談事業：該当者2名（G、T）の相談が終了。3名（S、E、R）継続、1名（H）追加。計21回 ③　（2019年より継続）「保証人事業」より移管された当事者相談事業：2020年は行うことができず、2021年春実施に延期。 ④　多言語若手通訳派遣事業： a. 通訳登録：スペイン語3名、ベトナム語3名、カンボジア語2名、タガログ語1名を登録した。登録者9名 b. 通訳派遣：依頼がなく行わなかった。 c. 通訳ブラッシュアップのための母国語教室：年5回実施（1/19, 2/9, 2/16, 7/19, 8/2）。3～6月はコロナ禍で実施できず。7・8月はオンラインで実施したが、小さい子どもの世話で中々進まず、9月以降は実施できていない。計7回 ⑤　（2019年より継続）外国籍母子の生活支援：母の仕事が決まり、生活の安定が見られた。母には④の事業へのかかわりを依

	頼して関係を継続中。相談事業としては終了。 ⑥ （2019年より継続）外国籍中学生と母の支援：1/17母子面談。2/28母面談。3/19ケース会議。中学生が2月に母国へ帰国。コロナ禍で中学生は日本に戻れない状況で、進路相談もあることから継続して様子を見ていく。計3回 ⑦ （新規）H中学校より母語による学習支援依頼：市内中学校から外国人生徒への母語による学習支援者の紹介依頼を受け、支援者の紹介を行った。紹介後は、定期的に支援者から支援の様子などの報告を受け、支援状況を把握した。また、月1回程度スタッフが学校訪問をして支援の様子を見学し、支援状況を把握したり支援に関して助言をしたりして、より良い支援が進められるようにした。学校訪問：事前1回、実施中3回　計4回
収入金額	50,000円（歳末助け合い分配金）
支出金額	111,291円（諸謝金59,021円、旅費交通費5,000円、消耗品費41,270円、雑費6,000円）

学校・外国人・子ども支援に関する普及啓発事業

⑩普及啓発活動

【事業総括】

2019年度に引き続き、学校支援、外国人支援、子ども支援の必要性を広く市民に呼び掛けるための活動を9部門に分けて展開した。主たる事業は以下のとおりである。

①2020年教育講演会は成蹊大学文学部准教授の澁谷智子氏をお招きし「ヤングケアラーを考える～子どもの視点から学校教育を問い直す～」をテーマとして開催した。本テーマは2019年に引き続き実行委員による話し合いによって決定した。

また、2020年3月以降の突然の休校宣言に始まる一連のコロナ禍とその影響を受けて、このような事態を今後の教育に十分生かせるよう何らかの対応が必要と考え、2021年の教育講演会を前倒しする形で、連続5回からなる教育講演会連続講座「コロナ禍で考える教育のありかた」を企画・開催することとなった。2020年分として開催した連続講座第1回から第3回までの各回のテーマ及び講師は以下のとおりである。

第1回座談会　教育の不平等と学校の役割
話題提供：清水睦美氏（日本女子大学教授）

第2回講演会　教育においてICTを飼いならすために
講師：石井英真氏（京都大学大学院准教授）

第3回講演会　なぜ、少人数学級が必要なのか
講師：本田由紀氏（東京大学大学院教授）

なお、第4回および第5回については以下のとおりテーマと講師を計画し2021年度の

事業として実施予定である。 第4回座談会「偏見・差別・自粛警察を考える」 話題提供：山口毅(帝京大学准教授) 第5回講演会「コロナ禍で考える未来の社会と教育」 講師：岡野八代（同志社大学教授） ②「Ed.ベンだより」はNo.35～40の計6号を発行した。教育講演会が連続講座となったことを受けて年明けに1号分を追加発行することとなった(予算は次年度)。 ③ホームページは各事業内容の進行にあわせ随時内容を更新した他、連続講座の開催にあわせ専用バナーを設置し集客に努めた。アクセス数3956で前年比751増となった。 ④2020年度版のパンフレット(三つ折版)を作成・配布した。 ⑤15周年記念誌の作成準備として、過去の教育講演会の要旨の作成をしている。 ⑥資料・書籍の管理販売として、教育講演会の会場及び部室にて書籍を販売した。 ⑦他機関・他団体との関係構築として、都内の学生団体GAILから当法人の活動内容について説明してほしい旨要望が寄せられたため、これに対応した。 ⑧研究者対応として、アメリカの大学院生より調査研究の申し入れがあり、対応した。 ⑨会員に対してはメール配信と郵送による情報提供を継続している。広報誌や事業について迅速な情報提供ができるよう努めた。	
担当者	●活動代表（理事）角替弘規 ○スタッフ　池田喬　清水睦美　前田拓郎
内容・日時・場所・参加者数	①【2020年教育講演会】 2020年2月24日(月・祝) 13:00～17:00 場所：大和市シリウス601 参加者：26名(懇親会8名) 【2020-2021年教育講演会連続講座】 第1回座談会：2020年10月24日、場所：ｵﾝﾗｲﾝ、参加者10名 第2回講演会：2020年11月15日、場所：ｵﾝﾗｲﾝ、参加者15名 第3回講演会：2020年12月26日、場所：ｵﾝﾗｲﾝ、参加者30名 ②大和市を中心に教育関係・国際関係団体に配布(2000部／回) ③随時（担当者打合せを月1回開催） ④2020年度パンフレット　4月配布(2500部) ⑤7月～9月分担者決定、12月末原稿集約 ⑥売上合計5,670円　10冊（『ヤングケアラー』710円×7冊、過去書籍100円×2冊、500円×1冊） ⑦1件　8月14日 ⑧1件 11月25日
収入金額	39,670円（参加費）
支出金額	446,612円(賃借料7,400円、諸謝金100,233円、印刷製本費100,940円、通信運搬費114,118円、旅費交通費2,114円、会議費9,166円、消耗品費51,311円、業務委託費45,000円、修繕費13,580円、雑費

	2,750 円）

⑪法人の事業円滑実施のための活動

【事業総括】

①・2020 年度総会…2 月 24 日（月）開催

・活動報告会を年 11 回開催し報告・審議を行った。5 月以降はコロナの拡大によりオンラインで実施した。オンラインの方が参加しやすい理事もいた。

・事務局会議を年 9 回開催し事務局運営・事務所管理を行った。場合に応じてオンラインで実施した。

・年間計画を作成し、活動の全体予定を把握した。

②・会計については、月 1 回の会計処理を行った。

・年 2 回の会計締日を設定し予算の執行状況を確認した。計画では年 3 回だったが、コロナ拡大により 2 回とした。

③・コロナ禍でもあり、特に目立った活動はなかった。

④・都内・県内大学生から、多文化研究でいちょう団地の子どもたちの様子を知りたいとの要望があり、「すたんどばいみー」に対応を依頼した。2 件

・都内大学院生から、多文化研究で学校や地域での子どもたちへの支援の実態について話を聞きたいとの要望があり対応した。

担当者	●活動代表（理事）神戸芳子　武内敏子 ○スタッフ　清水睦美　篠原弘美　内藤順子 （会計）　篠原弘美　清水睦美　神戸芳子　小西永里子 （震災関連）　清水睦美
内容・日時・場所・参加者数	① 総会：2020 年 2 月 24 日（月）10:30～11:30 大和市シリウス 601　参加者 62 名（正会員 86 名） 活動報告会：11 回（原則奇数月）大和市ベテルギウス 冨士見文化会館、オンライン 理事 15 名 事務局会議：月 1 回　当法人事務所、オンライン ② 会計処理：月 1 回　当法人事務所、大和市ベテルギウス 会計確認（締め）：2 回（1 月、9 月）当法人事務所 会計監査：年 1 回（2 月 11 日）当法人事務所 ③ 活動なし ④ 11/1、11/27、12/2　当法人事務所
収入金額	936,005 円（会費 706,000 円、寄付 194,000 円、雑収入 36,005 円）
支出金額	313,270 円（印刷製本費 8,200 円、通信運搬費 120,220 円、消耗品費 8,481 円、ガス水道光熱費 37,089 円、賃借料 8,240 円、租税公課 18,150 円、保険料 3,570 円、諸会費 5,000 円、修繕費 15,400 円、雑費 88,920 円）